

# 「豊臣期大坂図屏風」に描かれた 景観と人物

内田 吉哉 (特別任用研究員)

## はじめに

今、仮に町へ出て「日本の戦国時代の有名人を三人挙げてください」という質問を投げかけるとすれば、最も多い答えは、やはり織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の三人だろう。この三人の中で、とりわけ大阪では豊臣秀吉の人氣が突出している。大阪人の秀吉への思い入れは強く、府のシンボルマークに秀吉の馬印であった千成瓢箪を图案化するほどである。「太閤さんのつくった町」であるという意識がそうさせるのだろうか。

ところが現在の大阪には、豊臣秀吉の築いた大坂を偲ばせる文化遺産は思いのほか多くない。九州の戦国大名、大友宗麟が「三国無双」と称えた豊臣大坂城は、慶長二十年(一六〇〇)に大坂夏の陣で焼失した<sup>1)</sup>。その後、大坂城は元和六年(一六二〇)、徳川秀忠によって再築されたのだが、その際に豊臣大坂城は完全に地中に覆い隠されてしまった。徳川氏が築いた大坂城の天守は、寛文五年(一六六五)に、落雷による火災で失われた。天守閣は、昭和三年(一九二八)に市民の寄付によって復興され、豊臣期の姿を取り戻した。しかしその天守閣も市街の高層化にともない、現在ではビルの谷間にわずかに透かし見る状態にある。往時には遙か彼方からも仰ぎ得たであろう豊臣大坂城の偉容とその城下の賑わいは、今となっては歴史の中に残るばかりである。

かつての都市の賑わいを知ることができる絵画資料として、京都の場合

は「洛中洛外図屏風」がある。「洛中洛外図屏風」が誕生したのは、応仁の乱後間もない十六世紀初頭の頃であるとされる<sup>2)</sup>。その後も「洛中洛外図屏風」は制作され続け、現存する作例だけでも一〇〇点あまりになる。徳川幕府によって江戸が世界有数の大都市となつてからは、こうした都市図屏風の系譜に「江戸図屏風」が加わることになった。

豊臣家の栄華とともに繁栄を誇つた大坂についても、豊臣大坂城とその城下を画題とする屏風絵が描かれている。しかし現在残された作品はわずか四点にすぎない。その内の二点は「大坂冬の陣図屏風」(東京国立博物館蔵、六曲一双)と「大坂夏の陣図屏風」(大阪城天守閣蔵、六曲一双)で、慶長年間(一五九六―一六一五)の末期に起こつた、豊臣家の存亡を賭けた戦いを描く合戦図屏風である。平和に繁栄する豊臣期の大坂を描いた作例は「大坂城図屏風」(大阪城天守閣蔵、二曲一隻)と「京・大坂図屏風」(大阪歴史博物館蔵、六曲一双)の二点のみになる。

こうした中、二〇〇六年十月、オーストリアで豊臣期の大坂を描いた屏風絵が新たに発見された。その屏風絵はオーストリア第二の都市、グラーツ市のエッゲンベルク城博物館が所蔵している。この屏風絵の制作年代はおよそ十七世紀中頃とみられ、三〇〇年以上にわたり名もなき絵画として大きな注目を受けることなく過ごしてきた。ところが、この度発見されたことにより、豊臣秀吉が築いた大坂城と城下が活写される図容から「豊臣期大坂図屏風」と名付けられ、たちまち耳目を集めることになったのである。

この「豊臣期大坂図屏風」をめぐる、二〇〇七年より関西大学とオーストリアの州立博物館ヨアネウム、大阪城天守閣の三者間で共同研究が行われている。本稿では、「豊臣期大坂図屏風」発見の経緯を紹介し、描かれた景観と人物・風俗について検討する。

## 一、「豊臣期大坂図屏風」の発見

エッゲンベルク城博物館は、オーストリア・シュタイヤマルク州立博物館ヨアネウムが統括する十三の博物館の一つである(図1)。エッゲンベ



図1 エッゲンベルク城



図2 オーストリアとグラーツ市の位置



図3 グラーツ市の町並み

ルク城博物館の所在地、グラーツ市は「音楽の都」ウイーンから列車で約二時間半、オーストリア南東部に位置し、シュタイアマルク州の州都でもある(図2)。シュタイアマルク州は、別名「千の要塞の地」とも呼ばれ、グラーツという地名もスラブ語の「Gradec(グラデツ=小さな城)」という語に由来するという。十六〜十七世紀には、オスマン帝国に対する重要な防御拠点として、多数の要塞が築かれた地域であった。現在グラーツ市には世界最大の武器博物館があり、甲冑・槍・銃など三十万点を超える武器が展示されている。

グラーツ市の中央部にはムーア川が流れており、その東側が旧市街にあたる。グラーツ市の旧市街は一九九二年に世界遺産に指定されている。赤茶色のレンガ屋根が連なる街並みが、中世の雰囲気を感じさせてくれる(図3)。古都の趣をよく保存するグラーツ市は、現代文化の発信基地としての顔も持つ。一九八〇年代から、「グラーツ派」と呼ばれる、現代建築家グループがヨーロッパ建築界をリードし、現代建築史に確固たる地位を築いている。

エッゲンベルク城は、グラーツ市の西側の郊外にある。一九五三年から、シュタイアマルク州の州立博物館ヨアネウムに統括される博物館の一

ブルク家の貴族になったのである。皇帝の信頼を得たハンス・ウルリッヒは、その後も公爵・枢密顧問官長へと昇進し、一六二五年には中部オーストリア地域の総督の地位についた。

一代で異例の立身をとげたハンス・ウルリッヒには、新しい総督の地位と権力を目に見える形で示す必要があった。そのために建築されたのが、宮廷付の建築士ピエトロ・デ・ポミスに設計を依頼した、エッゲンベルク城である。

「豊臣期大坂図屏風」がグラーツの地に渡ることになったのは、エッゲンベルク侯三代目、ヨハン・ザイフェルト(一六一四〜一七一一)が関与していると考えられる。ザイフェルトは芸術に深い関心を示した人物で、アントワープの商人から多くの芸術品を購入している。ヨハン・ザイフェルトの没後、一七一六年に作成された財産目録には「インド風の屏風、二十五フロリアン」と記された一項があり、現在までの研究では、これが「豊臣期大坂図屏風」ではないかと推測されている<sup>3)</sup>。

「豊臣期大坂図屏風」はエッゲンベルク城博物館二階の「日本の間」に飾られている(図4)。元は八曲一隻の屏風であったと考えられるが、現在は一扇ずつ分割され、八枚のパネルとして壁面に嵌め込まれている。そ

つとして公開されている。  
エッゲンベルク城の建築は一六二五年にさかのぼる。建築の背景には、初代エッゲンベルク侯ハンス・ウルリッヒ(一五六八〜一六三四)とハプスブルク家とのつながりが大きく関わっている。

一六一九年、オーストリア・ハプスブルク家のフェルディナントII世が、神聖ローマ帝国の皇帝に即位した。この皇帝の治世に、ハンス・ウルリッヒは豊かな外交力を駆使し、一介の商人からハプス



図4 エッゲンベルク城「日本の間」

のため現地では長らく、これが日本の屏風であるとは認識されていなかった。この屏風に再び光を当てたのが、バーバラ・カイザー氏（エッゲンベルク城博物館主任学芸員）である。

「豊臣期大坂図屏風」は、エッゲンベルク城「日本の間」の壁画パネルとして使用される間に料紙が劣化し金雲が剥落しかけるなどの損傷が生じていた。図容が判別できない箇所もあり、損傷部分は画面下部に多く見られた。これは「豊臣期大坂図屏風」が壁に嵌め込まれた際、ちようど人の肩が当たる高さ画面下部が位置することによる。

カイザー氏は、オーストリア・ウィーンにあるシェーンブルン宮殿の修復所に「豊臣期大坂図屏風」の修復を依頼した。八枚のパネルは「日本の間」の壁から取り外され、二〇〇〇年から二〇〇四年にかけて修復を受けた。その際に、屏風の下張り文書が本紙より分離され、写真撮影されている。

二〇〇六年五月、州立博物館ヨアネウム総監督ペーター・パケシュ氏から、ドイツ・ケルン大学日本学科教授フランチスカ・エームケ氏に「豊臣期大坂図屏風」の調査依頼があった。同年九月、エームケ氏は「豊臣期大坂図屏風」の情報を携え、関西大学の招聘研究者として来日した。エームケ氏が持参した写真画像を、関西大学ならびに大阪文化遺産学研究所センターで鑑定した結果、同センター研究員北川央氏（大阪城天守閣研究副主幹）らによって、現存作例のきわめて少ない、豊臣期の大阪を描いた屏風であることが確認された。同年十月十八日、エームケ氏は関西大学において「豊臣期大坂図屏風」を紹介する講演をおこない、翌日の「朝日新聞」朝刊第一面にてカラー写真とともに報じられた。

その後、二〇〇七年六月五日に関西大学と州立博物館ヨアネウムとの間で「豊臣期大坂図屏風」の共同研究協定が締結された。協定は六か条からなり、シンポジウムの開催、資料の相互利用、研究成果の交換を行なうことなどが取り決められた。共同研究の期間は二〇〇七年から二〇〇九年までの三か年である。同年七月二日には大阪城天守閣とも同様の協定を結び、三者間の共同研究体制が整えられた。

二〇〇九年三月現在までに、「豊臣期大坂図屏風」の研究に関する国際シンポジウムが四度開催されている。二〇〇七年九月には、大阪で二つの国際シンポジウムが連日開催された。一つのシンポジウムは「新発見「豊臣期大坂図屏風」の魅力 ―オーストリア・グラーツの古城と日本―」（主催：関西大学文学部／関西大学ならびに大阪文化遺産学研究所センター）である。このシンポジウムでは、「豊臣期大坂図屏風」が日本からオーストリアへ渡ることになった経緯や時期について議論した。もう一つは朝日・大学パートナーズシンポジウム「新発見「豊臣期大坂図屏風」を読む」（主催：朝日新聞社／関西大学、特別協力：大阪城天守閣）である。こちらは屏風に描かれた景観や人物の絵画情報を読み取ることをテーマとして掲げた。二〇〇八年八月には、オーストリア・グラーツで「魅惑の探訪、豊臣期の大阪―エッゲンベルク城で再発見された大坂図屏風―」（主催：州立博物館ヨアネウム）が開かれた。同年十一月には、東京にて「新発見「豊臣期大坂図屏風」」（主催：関西大学ならびに大阪文化遺産学研究所センター／エッゲンベルク城博物館）が開催された。また、これまでに研究者間の情報交換を目的とする「豊臣期大坂図屏風」研究会が五度行われている。

## 二、「豊臣期大坂図屏風」に描かれた景観

「豊臣期大坂図屏風」各扇の大きさは、高さが約一八〇センチ、幅が約六〇センチである。屏風の両端にあたる第一扇と第八扇は幅が約五十八センチとやや狭い。金雲は、三列の粒状紋で縁どった中に牡丹花・桜・梅鉢紋を配置している。これらの紋様は胡粉盛上の技法が施されている（図



図6 「豊臣期大坂図屏風」(エッゲンベルク城博物館蔵)

5)。  
 屏風の制作者は町絵師と考えられる。狩野博幸氏は、「洛中洛外図屏風」のうち林原美術館本、サントリ美術館本、島根県立美術館本、細見美術館本と同系統の絵師または工房による制作であろうとする見解を示している<sup>6)</sup>。  
 屏風の景観は、第一扇上部の堺から第八扇の宇治平等院までの範囲を描いている。全八曲の画面中央に大きく大坂城とその城下が描かれる。画面下部を横断する川は淀川(大川)である。大坂城と淀川的位置関係から、北から俯瞰した構図であることがわかる(図6)。これまでに確認されている豊臣期の大坂を描いた四点の屏風は、いずれも西から大坂城をのぞむ構図で



図5 「豊臣期大坂図屏風」  
金雲

描かれている。北から大坂城を描く構図は、「豊臣期大坂図屏風」の大きな特徴の一つといえよう。

第一扇から第八扇まで画面の下端には、なだらかな丘陵が描かれている。箕面、茨木、高槻など、大坂城の北方に広がる北摂の山並みを表わしたものであろうか。ただし、元和年間(一六一五～一六二四)から寛永年間(一六二四～一六四四)にかけて制作された「洛中洛外図屏風」には、画面下部に架空の丘陵を描く作例がみられる。その中には狩野氏が「豊臣期大坂図屏風」との表現の類似を指摘する林原美術館本、サントリ美術館本も含まれている。「豊臣期大坂図屏風」に描かれる丘陵が、現在の地形を表わしたものではないということも考えられる。

「洛中洛外図屏風」など都市図屏風では、画面に月次風俗を描き、また春夏秋冬の景物を散りばめるなどして、四季を表現する作例が見られる。「豊臣期大坂図屏風」では、第一扇から第四扇までには桜、第五扇から第八扇にかけては紅葉が描かれている。それぞれ春と秋の季節を表現していると考えられる。四季のうち、夏と冬を表わす景物は確認できない。ただし、これまでの共同研究において、この「豊臣期大坂図屏風」と一対をなすもう一隻が、かつて存在したのではないかとの見解が示されている<sup>7)</sup>。もし「豊臣期大坂図屏風」に「失われたもう一隻」があったとすれば、そこには夏と冬の景観が表わされていたと考えられよう。

現在、「豊臣期大坂図屏風」は一扇ずつ分離されてエッゲンベルク城「日本の間」の壁に嵌め込まれているため、屏風としての形は留めていない。図6は、修復のため壁から取り外された際に撮影された、各扇の写真を並べて合成したものである。ところが、そうして各扇を並べてみると「豊臣期大坂図屏風」の画面



図7 修復前の「豊臣期大坂図屏風」

は、各扇同士の継ぎ目部分が完全には連続していない。これは二〇〇〇年から二〇〇四年にかけての修復の際に補筆したことによると思われる。各扇の修復前の画像を見ると、それぞれ左右の端が二センチ程度、帯状に変色していることが確認できる(図7)。この部分は壁に嵌め込まれる際に、縁取りの木枠の下に敷かれていたとみられ、とりわけ画面の損傷が顕著であった。

以下、本章では「豊臣期大坂図屏風」に描かれた景観を検討する。

## (一) 大坂城

画面の大部分を占める大坂城のうち、第六扇と第七扇が本丸の部分になる(図8)。本丸には五層の天守が聳え立つ。入母屋造の屋根を重ね、最上階に廻縁と高欄を備えた望楼式天守である。豊臣大坂城の天守が望楼式であったことは、「一五八六年十月十七日フロイス書簡」の記述によって確認できる<sup>8)</sup>。

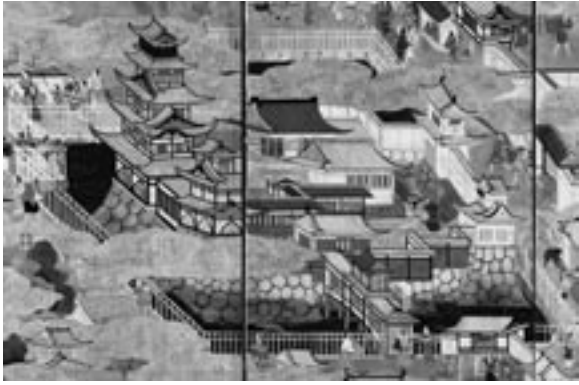


図8 「豊臣期大坂図屏風」大坂城本丸

「豊臣期大坂図屏風」の天守は最上階のみ黒壁に塗られ、他の四層の外壁は白である。第一層から第四層までは白壁に狭間が切られ、第一層には火燈窓がある。「豊臣期大坂図屏風」の天守を他の屏風絵と比較すると、細部の表現にはいくつかの違いが見られる。豊臣大坂城を描いた他



図9 「大坂夏の陣図屏風」  
(大阪城天守閣蔵)

の屏風絵では、天守はいずれも五層の望楼式で外壁は黒色に描かれている。

「大坂夏の陣図屏風」では、第四層には虎、第五層には鶴の図柄が金であしらわれている(図9)。この屏風は合戦図屏風として最も優れた作品の一つとされ、国の重要文化財に指定されている。制作年代は慶長二十年(一六一五)の大坂夏の陣後間もないころとされる。豊臣大坂城天守の復元を考える上で、最も重要視されてきた絵画である<sup>9)</sup>。

「大坂冬の陣図屏風」は、織田信長、豊臣秀吉、そして徳川幕府の御用絵師を務めた狩野家に伝わっていた、屏風の下絵である(図10)。明治十九年(一八八六)狩野謙柄氏から東京国立博物館に寄贈された。元は十枚続きの未表装の絵であったが、大正十四年(一九二五)に、付属していた「部隊名の覚書」と「屏風絵絵本之下絵 相違成事之覚書」を合わせて六曲一双の屏風に仕立てられた。『中院通村日記』に、元和二年(一六一六)絵師狩野興以が「大坂攻之図屏風」を描きあげたことが記されており、中村博司氏によって「大坂冬の陣図屏風」との関連が指摘されている<sup>11)</sup>。

「大坂城図屏風」は、慶長年間の制作とみられる貴重な作例である。五層の外壁すべてが金泥で描かれた菊花紋・桐紋・牡丹花紋・三つ巴紋で埋め尽くされている。現在は豊臣大坂城を描いた扇と、四天王寺を描いた扇の二扇のみが残されている(図11)。

「京・大坂図屏風」の天守は、腰板は黒であるが柱は赤く塗られ、カラフルな印象を与える。この屏風は豊臣期の大坂を描いた他の絵を写したも



図10 「大坂冬の陣図屏風」  
(東京国立博物館蔵)



図11 「大坂城図屏風」(大阪城天守閣蔵)



図12「京・大坂図屏風」(大阪歴史博物館蔵)

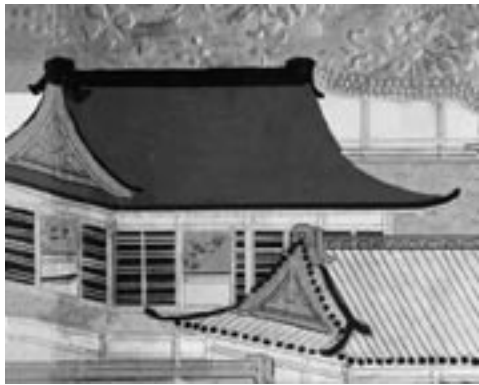


図13「豊臣期大坂図屏風」千畳敷御殿



図14「豊臣期大坂図屏風」極楽橋



図15「大坂城図屏風」極楽橋

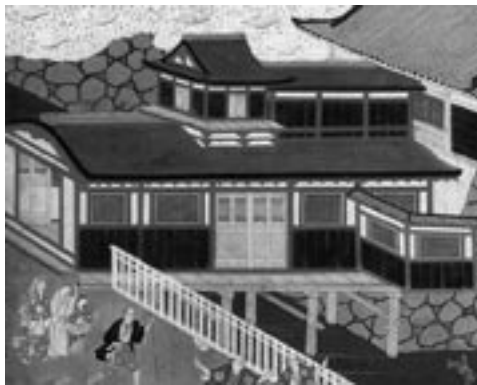


図16「京・大坂図屏風」極楽橋

のと考えられ、制作年代は江戸時代中期と見られている(図12)。

以上に見てきたように、大坂城の天守ひとつを例にとっても他の絵画史料とは様々な差異があることがわかる。こうした細部の描写をとらえて考察を進めるにはなお詳細な検討が必要となるため、本稿ではひとまず各屏風の比較を述べるのみにとどめておく。

豊臣大坂城の本丸には千畳敷御殿と呼ばれる建物があったとされる。「豊臣期大坂図屏風」天守の右手には、本丸内の建物がある。そのうちの棟は檜皮葺の大屋根を持ち、壁面に装飾が施された広大な建物に描かれている(図13)。これが千畳敷御殿を表していると考えられる。千畳敷御殿は豪華に装飾されていたことが、イエズス会宣教師による「一五九六年日本年報補遺」に記録されている<sup>12)</sup>。

「一五九六年日本年報補遺」  
(大坂と都での造営のこと)

(前略)(太閤)はその政庁に千畳の畳(それは非常に立派な敷物の一種である)を敷き、それをダマスコ織と全絹の黄金色の縁で覆うよう命じたが、畳は別な箇所ですいたように、それらのどれも横八パルモ、縦四パルモある。この政庁は非常に高価な材木をもって建築されており、その内部は大いなる黄金で燦然と輝き、ほとんど目を疑うほ

どである。(後略)

本丸の北側(画面下側)と二の丸との間に、極楽橋がある。望楼を乗せた廊下橋として描かれている(図14)。同様の極楽橋は、「大坂城図屏風」と「京・大坂図屏風」にも見られる(図15、16)。イエズス会「一五九六年日本年報補遺」に、秀吉がこの極楽橋を建設したことが記されている<sup>13)</sup>。

「一五九六年日本年報補遺」

(前略)(太閤)はまた城の壕に巨大な橋が架けられることを望んだが、それによって既述の政庁への通路とし、また(橋に)鍍金した屋

根を設け、橋の中央に平屋造りの二基の小櫓を突出させた。その小櫓には、四角の一種の旗幟〔長さ八〇九パルモ、幅四パルモ〕が鍍金された真鍮から垂れ、また（小櫓）には鳥や樹木の種々の彫刻がかかっている。（小櫓）は太陽の光を浴びるとすばらしい輝きを放ち、櫓に新たな装飾を添える。（橋の）倚りかかれるよう両側の上方に連ねられた欄干は、はめ込みの黄金で輝き、舗道もまた非常に高価な諸々の装飾で鮮明であり、傑出した工匠たちの手によって入念に仕上げられたすばらしい技巧による黄金塗りの板が介在して輝いていた。そこで堺奉行（小西ベント如清）はこの建物について話題となった時、我らの同僚の某司祭に、（その橋は）十ブラサ前後あるので、黄金と技巧に一万五千金が注ぎ込まれたことを肯定したほどである。

この記録により、極楽橋が建設された時期は慶長元年（一五九六）であったことがわかる。フロイスの記述に表される極楽橋は、金を用いた鮮やかな色彩と「鳥や樹木の種々の彫刻」によって壮麗に装飾されていたとされる。「豊臣期大坂図屏風」の極楽橋は壁面に花卉紋の装飾が施され、「大坂城図屏風」「京・大坂図屏風」と比較しても最もフロイスの記述に近い外観を備えているといえよう。

ところが、この豪華な極楽橋は慶長五年（一六〇〇）には京都の豊国神社へ移築されたことが『義演准后日記』に記されている<sup>14</sup>。

すると「豊臣期大坂図屏風」に描かれた極楽橋は、慶長元年から五年までのごく短い期間にのみ見られた景観を描いていることになる。都市図屏風では、同時には存在しなかった景観を一つの屏風の中に描き込む手法が用いられることは珍しくない。そのためこの極楽橋の描写のみをもって、ただちに屏風全体の景観年代を慶長元年から慶長五年までの五年間に限定することはできない。しかし「豊臣期大坂図屏風」の景観年代をおよそ慶長年間であると特定する手がかりと見ることは可能であろう。

第四扇から第五扇にかけて、二の丸を囲む堀のさらに外側に、石垣と城壁で区画された曲輪が描かれている。これは豊臣大坂城の三の丸であると考えられる（図17）。

豊臣大坂城の研究史において、三の丸の存在をはじめ具体的に提示し



図17「豊臣期大坂図屏風」大坂城三の丸

ことができる。

大坂城の南（画面上方）、第六扇と第七扇には、漆喰塗籠の塀をめぐらせた武家屋敷がみえる（図18）。これは、玉造にあつたとされる大名の邸宅であると考えられる。豊臣期の大坂で、玉造には史料に残るだけでも前田利長、蜂須賀家、鍋島家などの屋敷があつたことがわかる<sup>17</sup>。

その中でも前田利長の屋敷は三層の櫓を上げ、まるで城のような構えであつたことが『関原集』と『川角太閤記』に記されている<sup>18</sup>。

『関原集』

加賀大納言利家死去付利長加州江下ル事并忠興御加増之事

一、慶長四年亥閏三月三日加賀大納言利家卿死去、就其肥前守利長加州江くたられ、内府公其外何茂被申、利長預りの大坂を明、何方へ断

たのは、岡本良一氏である。それまで、三の丸は大坂城最外郭の惣構と混同されてきた。惣構は、北は淀川、西は東横堀川、南は空堀（現在の大阪市天王寺区空堀町付近）、東は猫間川という長大な防御線である。岡本氏は三の丸が惣構とは別の曲輪であること、その築造工事が秀吉の最晩年にあたる慶長三年（一五九八）に行なわれたことを明らかにした<sup>15</sup>。その後、渡辺武氏によって、三の丸が描かれた「大坂冬の陣配陣図」（『櫻台武鑑』所収）が発見された<sup>16</sup>。この図では、豊臣大坂城には二の丸の外、西側から南側にかけて、さらにもう一重の城壁と堀で囲まれた曲輪があり、明らかに惣構とは別の曲輪が存在したことを見て取る



図18 「豊臣期大坂図屏風」 玉造の武家屋敷

もなく在国、其上大坂の居屋敷に三階の矢倉を被揚候儀、太閤の御遺言被相背、不届の至候、先矢倉の儀、利長留主居二被仰付、御やふらせ候て北国へ目付を被遣、依之加賀陣と取沙汰在之、

『川角太閤記』

一、大納言殿煩終に本服無之、慶長四年亥閏三月三日大坂玉造口の屋形にて遠行の事、

一、大坂において肥前殿いせひ日をおつて興に乘し申候事、其子細ハ鍋島屋敷・島津屋敷二ヶ所を一つに被成、三方を堀にし、其普請ハ毛利殿なり、扱角々にハ矢倉を上ヶ城構の様に見へ申候、大名・小名昼夜の御見廻、其上奏者ハ自分の者にてハ無御座候、右衛門允・長東大蔵仕候、四方にも扱々と沙汰仕候程に御座候、

「豊臣期大坂図屏風」では、第六扇の武家屋敷の敷地内に角櫓が描かれている。あるいは『関原集』にいう前田利長屋敷の「三階の矢倉」を表わしたのとも考えられよう。

(二) 都市のにぎわい

「豊臣期大坂図屏風」の淀川には、二つの大きな橋が架かっている(図



図19 「豊臣期大坂図屏風」 天神橋・天満橋・八軒家

19)。第三扇に架かる橋は天神橋、第四扇に架かる橋は天満橋であると考えられる。両橋ともに、南詰には木戸が設けられている。木戸はともに瓦葺きで、天神橋の木戸は番小屋も備えている。

天神橋と天満橋の間の淀川南岸は砂州として描かれている。砂州に船が着き、乗降する旅客で賑わう。この場所は江戸時代には八軒家と呼ばれた。地名の由来は、『撰津名所図会』によれば、この地に八軒の旅籠があったことから名付られたという<sup>19)</sup>。八軒家は京と大坂の間を結ぶ水運の要衝であり、淀川を上下する三十石船の発着点として賑わった。豊臣期の八軒家の様子は詳しく伝えられていないが、『石川忠総大坂陣覚書』に「天満町ニも火懸り、又内町八軒屋之あたりも焼申」と記され、「八軒家」の地名はすでに存在したことが知られる<sup>20)</sup>。

「豊臣期大坂図屏風」の淀川には多くの船が行き交う。その中で一際目を引くのは、第三扇の川御座船と第五扇に描かれる鳳輦をかたどった船である(図20、21)。川御座船は屋形の周囲に桐紋の幔幕を張り巡らせ、八挺の櫓を備える。





図20 「豊臣期大坂図屏風」 川御座船



図21 「豊臣期大坂図屏風」 鳳輦船



図22 「豊臣期大坂図屏風」 天満の町並み



図24 「豊臣期大坂図屏風」 高麗橋



図23 「豊臣期大坂図屏風」 東横堀川

鳳輦をかたどった船は唐破風造と方形造の屋根を備え、方形造の屋上には鳳凰を乗せている。黒く塗られた外壁には五羽の白鷺が描かれ、屋方の内壁には柳を描いた障壁画がある。

屏風の画面最下部、淀川の北岸には天満の町並みが描かれている(図22)。町の賑わいは表現されず、金雲の間に町家の屋根だけが覗く。町家の屋根が連なる中、第三扇には二階建ての土蔵が見られる。第三扇にはまた、淀川から北(画面下)に向かって伸びる堀川が描かれている。これは慶長三年(一五九八)に開削された天満堀川であると考えられる。ただし、天満堀川は正しくは天神橋の西(画面右方)に位置するはずであり、地理的には正確な描写ではない。

第二扇に描かれる、淀川と直交する川は東横堀川である(図23)。東横

堀川は、豊臣秀吉によって天正十三年(一五八五)に開削された<sup>2)</sup>。

画中の最も手前に架かる橋は高麗橋であると考えられる。高麗橋の東詰には木戸が設けられている。高麗橋は江戸時代には、西日本の街道の起点とされた。「豊臣期大坂図屏風」の高麗橋上には、両替商がみられる。膝元にあるのは銭の束である。客は遠路大坂にたどり着いたばかりの旅人であろうか(図24)。

「豊臣期大坂図屏風」の東横堀川には、高麗橋の他にも三つの橋が架けられている。豊



図25 「豊臣期大坂図屏風」 船場の町並み

臣期の東横堀に架かっていた橋として、慶長五年（一六〇〇）の史料には浜の橋、高麗橋、平野町橋、淡路町橋、備後橋、本町筋橋、久太郎町橋、久宝寺町橋、かんとうし町橋、うなき谷町橋、横橋の名がみられる。しかし現時点では高麗橋以外の三つの橋が、どの橋に相当するのか特定することは難しい。この屏風の景観年代は慶長年間であるが、制作年代は十七世紀と考えられることから、慶長より後の時期の情報が混入している可能性も視野に入れておく必要があるだろう。

東横堀川の西（画面右）側には、船場の街並みが広がる（第一扇・第二扇）（図25）。大坂の町は、大坂城築城と同時に造られた。天正十一年（一五八三）には、すでに大坂城に先んじて大名屋敷や町屋敷が完成していた<sup>23</sup>。当初は大坂城から四天王寺へ向けて南側へと街路が延び、西側への開発はおよそ東横堀川を限度とするものであった。

ところが慶長元年（一五九六）の大地震により、大坂の町は深刻な被害を受けた。秀吉はこの打撃からの復興にあたり、慶長三年（一五九八）に大坂城三の丸の建設と、それにもなう町屋敷の移転を行なった。町屋敷の移転先として東横堀川の西側の地が用意された<sup>24</sup>。これを契機に船場の開発が急速に進むことになった。以降、大坂の町は西へと拡張することになったのである。

「一五九八年度年報（パシオ書簡）」によれば、船場の街区は直線道路で区画されていたことが記されている。また町家の高さをそろえるなど、整然とした都市建設の計画があったことがわかる。

「豊臣期大坂図屏風」の船場の町には、十七軒の町家と三棟の土蔵が描かれている。第一扇には神社が見られる。町家のうち七軒は二階建てである。屋根の葺き方は三軒が瓦葺、八軒が石置き板葺



図26 「豊臣期大坂図屏風」 住吉大社

で、五軒が茅葺となっている。一軒は屋根が金雲に隠れている。また、すべての町家に卯建があげられている。

一つの都市図屏風の中に描かれる景観の年代が、すべて同じであるとは限らない。が、もしこの屏風における船場の描写が慶長年間の景観を表わしたものであるとすれば、豊臣期の船場を描いた唯一の絵画史料ということになる。

### （三） 神社

「豊臣期大坂図屏風」の主題を考えるとすれば、それは画面の中央を大きく占める大坂城とその城下ということになるだろう。対して屏風の周縁部には、大坂城を囲むように神社が配されている。

第三扇から第四扇にかけて、画面上部に住吉大社が描かれている（図26）。社殿の描写は写実的ではないが、反橋と石舞台によって住吉大社であると判断できる。住吉大社の石舞台は『住吉松葉大記』によれば、慶長十二年（一六〇七）に豊臣秀頼が寄進したものであるとされる<sup>25</sup>。

住吉大社は摂津国の一之宮として、あるいは航海安全を祈願する神社として、古くから諸人の崇敬を集めてきた。大坂を題材とする絵画では、住吉大社と四天王寺とをあわせて描く作品が多くみられ、大坂の名所として広く知られてきた。

住吉大社の左、第四扇と第五扇に描かれる寺院は四天王寺である（図27）。境内の大部分は金雲に隠れているが、第五扇には四天王寺西門前の石鳥居が見られる。この石鳥居は、永仁二年（一一九四）に忍性が建立したものである<sup>26</sup>。



図27「豊臣期大坂図屏風」四天王寺

住吉大社の境内前を通るのは、旧暦の六月晦日に行なわれる荒和大祓神事の行列である（図28）。現在でも、大阪の夏祭りの最後を飾る祭りとして、七月末から八月一日にかけて住吉大社の夏祭りが行なわれる。本来この祭行列には四基の神輿が奉じられるが、「豊臣期大坂図屏風」では二基のみ描かれている。住吉大社を出発した行列は、神輿を奉じて堺の宿院頓宮へと向かう。行列の先頭が橋を渡り、今しも堺に入ろうとするところである。第一扇の上部に堺の町が描かれている（図29）。堺の町の様子について、ガスバル・ヴィレラは一五六二年に発信した書簡にて次のように記している<sup>27)</sup>。

「一五六二年、堺発信、ガスバル・ヴィレラ師の、イエズス会の司祭および修道士宛の書



図28「豊臣期大坂図屏風」荒和大祓神事



図29「豊臣期大坂図屏風」堺の町



図30「豊臣期大坂図屏風」第一扇の神社

日本全国において、この堺の市ほど安全な場所はなく、他の国々にとれほど騒乱が起きようとも、当地においては皆無である。（中略）市自体がいとも強固であり、その西側は海に、また東側は常に満々と水をたたえる深い堀によって囲まれている。  
またルイス・フロイス『日本史』には次のように記されている<sup>28)</sup>。  
ルイス・フロイス『日本史』  
都と堺には、どの街路にも両側に二つの門があつて、夜分にはこれらを閉じる習慣があつた。

これらの記事から、堺は木戸と環濠を備えた都市であつたことがわかる。「豊臣期大坂図屏風」の堺には、環濠は見られるが木戸は描かれていない。行列の目的地である宿院頓宮が、金雲の隙間から垣間見える。祭行列の歩く下方に住吉浦がある。白い砂浜が広がり、船で遊覧する人びとが描かれる。住吉大社と堺、住吉浦の位置関係から、この場面は西から見た構図であることがわかる。金雲で空間を区切り、大坂城や船場の場面とは異なる構図を同一画面の中に描いている。



図31 「豊臣期大坂図屏風」 宇治平等院



図32 「豊臣期大坂図屏風」  
岩清水八幡宮

第一扇の船場にある神社には、三つの破風を持つ本殿と多宝塔が描かれている。門前の両脇には池がある(図30)。  
現在の船場地区に鎮座する主要な神社は、御霊神社(大阪府中央区淡路町)、坐摩神社(大阪府中央区久太郎町)、難波神社(大阪府中央区博労町)、御津八幡宮(大阪府中央区西心斎橋)などがある。また地理的には船場から外れるが、生國魂神社(大阪府天王寺区生玉町)には昭和四十年代まで門前の両脇に蓮池が存在していた。しかし現時点では、これがどの神社を描いたものか特定することは難しい。

屏風の左端、第八扇には、京坂間の寺社が配置される。最上段には宇治平等院がある(図31)。描かれた建物は、中堂から延びる左右の翼廊の特徴的な形態により、鳳凰堂であることが確認できる。平等院の前に宇治川が流れ、巡礼が橋を渡って参詣する様子が描かれている。宇治川に浮かぶ小舟には柴が積まれている。「宇治の柴舟」といえば、古くは『新古今和歌集』寂蓮法師の歌に詠まれるなど、芸能において「宇治」を題材とするうえで欠かせないものであった。<sup>29)</sup>宇治平等院を画題とする場合、宇治川と柴舟があわせて描き込まれるのが通例である。



図33 「豊臣期大坂図屏風」 天王山と宝積寺

智光秀を破った山崎合戦の舞台となった地である。秀吉は大坂城を築くまで、この地を拠点としていた。

以上、本章では「豊臣期大坂図屏風」に描かれた景觀について検討してきた。豊臣大坂城の様相や廊下橋形式の極楽橋、船場の町並みが描かれることから、この屏風の景觀年代は、慶長年間(一五九六〜一六一五)であると考えられる。

### 三、「豊臣期大坂図屏風」に描かれた人物

都市図屏風は、景觀や建物とあわせて人びとの生活の営みが描き込まれ、風俗図としての側面も持つ。「豊臣期大坂図屏風」には総計四百九十三人の人物が描かれている。ある者は働き、ある者は遊び、さまざまな風俗をあらわしている。本章では「豊臣期大坂図屏風」に描かれた人物や風俗を検討する。

#### (一) 祭礼と遊興 ・祭見物

荒和大神神事の行列が進む路傍には、多数の見物人がつめかけている。

第八扇の中ほどにある神社は石清水八幡宮である(図32)。放生川にかかる安居橋を渡ると鳥居が見える。廻廊に囲まれた本殿があり、参詣客が描かれている。淀川を挟んで第八扇最下段には天王山と宝積寺がある(図33)。「豊臣期大坂図屏風」は、全八曲を通して画面最下段になだらかな丘陵が描かれている。その中で天王山はひととき高く描かれる。天王山は、

天正十年(一五八二)に秀吉が明



図34 「豊臣期大坂図屏風」  
箱膳を運ぶ



図35 「洛中洛外図屏風」  
(新潟県個人蔵) 箱膳



図36 「豊臣期大坂図屏風」 念仏踊



図37 「豊臣期大坂図屏風」  
鉦叩き

る。鉦叩きは、鉦の音とともに阿弥陀経を唱え、路上で喜捨を乞うものである。(図37)『三十二番職人歌合』八番にも、同様に僧形の人物が鉦を下げた姿がみられる。あわせて「息のをのくるしきときは 鉦鼓こそ 南無阿弥陀仏の声たすけなれ」という和歌が載せられている(図38)。

・鷹狩り

第八扇の小高い丘陵に、拳に鷹を

第一扇、堺の町でも行列の到着を待ち受ける人びとが立ち並ぶ。その後方に箱膳を持っていそいそと町の入口へ急ぐ男性が描かれている。同様の箱膳が新潟県個人蔵本「洛中洛外図屏風」東福門院入内行列の場面にもみられる(図34、35)。

・念仏踊

船場の一角で念仏踊が行われている。時宗の踊り念仏が次第に俗化したものである。中央の少年が持つのは八打鐘である。八つの鐘を曲芸のように打ち鳴らす(図36)。

・鉦叩き

道端で僧形の男性が胸から下げた鉦をT字形の撞木で打つ姿が描かれ



図39 「豊臣期大坂図屏風」 鷹狩 (1)



図40 「豊臣期大坂図屏風」 鷹狩 (2)



図38 『三十二番職人歌合』 鉦叩き

据えた人物が二人、笠をかぶり犬を連れた人物が二人、棒を持つ人物が一人描かれている(図39、40)。鷹狩りの光景である。その右手にはモチを塗った竿で鳥を捕らえようとする鳥刺しの姿も見える(図41)。鳥刺しは『三十二番職人歌合』三番にも所載されている(図42)。

・一服一銭

第八扇、鷹狩りが繰り広げられる丘のふもとで、一服一銭が商いをしてる。簡素な小屋がけの中で僧形の人物が茶を点でている(図43)。『七十



図43 「豊臣期大坂図屏風」 一服一銭



図41 「豊臣期大坂図屏風」 鳥刺し



図44 『七十一番職人歌合』 一服一銭



図42 『三十二番職人歌合』 鳥刺し



図46 「豊臣期大坂図屏風」  
勸進僧



図45 「豊臣期大坂図屏風」  
巡礼



図47 『三十二番職人歌合』 勸進僧

一番職人歌合』二十四番にも同様に僧形の 一服一銭が描かれている(図44)。

・巡礼

第八扇、宇治平等院と石清水八幡宮の場面には、これらの寺社に参詣する巡礼が描かれている(図45)。巡礼はいずれも笠をかぶり、笈摺おいずりを着て杖をつき、背に筥を負う姿に描かれる。笈摺は巡礼者が着物の上に着る、陣羽織に似た単物である。元来は山伏などが笈を背負って道中するうちに背中が擦れることを防ぐために着用したものである。

・勸進僧

第一扇の船場の街中に、柄杓を差し出す勸進僧が描かれている(図46)。勸進とは寺院の建立や復興などを目的として人びとに広く寄進を求め

とをいう。『三十二番職人歌合』十七番では、勸進僧は柄の長い柄杓を差し出す姿で描かれる(図47)。この柄杓で寄進の銭などを受け取るのである。

・山伏

第三扇に四人の山伏が描かれている(図48)。山伏は皆、兜巾をかぶり錫杖をついている。橋を渡るうとして二人は、身動きがしやすいように鈴懸の袖を後ろで結んでいる。腰から法螺貝を提げているのを見て取ることができるといわれる。山伏とは、山野に寝起きして修行する修験道の行者である。大坂から近い所では、吉野の金峯山や熊野が修験道場として名高い。山伏はまた、山から降りて都市や農村で加持祈禱を行なった。



図48「豊臣期大坂図屏風」山伏

(二) 生業と生活

・水汲み

第二扇、東横堀川で川の水を汲む女性がいる(図49)。大坂船場は海辺の低湿地を開発した街であるため、井戸を掘っても塩気を含んだ水しか得られなかった。そのため船場の住民は川の水を日常の飲料水にしていた。曲亭馬琴も『鞆旅漫録』の中で大坂の「あしきもの」として一番目に「飲水」をあげている。



図49「豊臣期大坂図屏風」水汲み(1)



図50「豊臣期大坂図屏風」水汲み(2)

対して堺の町では町中の井戸で水を汲む様子が描かれる(図50)。「浪華名所図屏風」(湯木美術館、八曲一双)でも同様に、東横堀川の川端に水を汲む井戸が設置されている(図51)。

・魚市場

第一扇、船場の北端(画面手前)に、魚を商う店がみられる(図52)。上げ見世の上に魚を並べた様子が描かれている。店内には竈や朱塗の食器が置かれている。店先に並ぶ魚の中には串に通したものも見られることから、あるいは魚料理を扱う店とも考えられる。



図51「浪華名所図屏風」(湯木美術館蔵)東横堀川の水汲み場

高麗橋を西へ渡った辺りは、近世以前は本鞆町・本天満町と呼ばれていた。現在の大阪市中央区伏見町にあたる。豊臣期には、この地に魚市場があったとされる。

第二扇では東横堀川沿いに、魚を買って帰る女性が見られる(図53)。二尾を手に提げているが、魚の種類は判然としない。



図52「豊臣期大坂図屏風」魚を商う店



図53「豊臣期大坂図屏風」魚を買って帰る女性

・漁師



図55 「豊臣期大坂図屏風」川漁 (2)



図54 「豊臣期大坂図屏風」川漁 (1)



図58 「大坂市街図屏風」(京都・個人蔵)「八けんやはたご町」の客引き



図57 「豊臣期大坂図屏風」客引きの女性

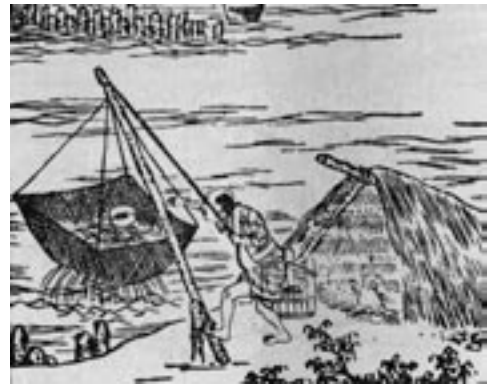


図56 『日本山海名産図会』白魚漁



図59 「豊臣期大坂図屏風」食物を運ぶ武士



図60 「川口遊里図屏風」(大坂歴史博物館蔵) 藁苞

運ぶ盆に乗っているのは鮑である。右の人物の盆には藁苞が三つのせられている。藁苞の中身が何であるのかは判然としない。類似の絵画史料として

・食物を運ぶ武士  
・(三) 城内の人物

第三扇、八軒家に船が着き、旅客が岸へ上がる。上陸した旅客に赤い前掛けをしめた女性が声をかける。旅籠の客引きの光景である(図57)。「大坂市街図屏風」(個人蔵、六曲一隻)でも「八けんやはたご町」で同様に客引きをする様子が描かれている(図58)。

・八軒家  
集まるので、それを柄杓で掬うのである。

第六扇、淀川に船を出して漁をする人びとが描かれる(図54)。大坂の淡水魚の市場は大坂本願寺の時期から始まったとされる。京橋の北詰に鮒市場があった。屏風に描かれる漁の方法は様ざままで、三艘の船のうち二艘は投網を打って魚を獲る。残る一艘は釣竿から糸を垂らす。図55では苦屋をかけ、四手網で魚を獲る人物がいる。右手には柄杓を持っている。同様の漁法が『日本山海名産図会』にみられる(図56)。図56は西宮の白魚漁である。川底に沈めた四手網を引き上げ、ふるい寄せると網の底に白魚が集まるので、それを柄杓で掬うのである。





図61 「豊臣期大坂図屏風」 駕籠に乗る武士



図62 「豊臣期大坂図屏風」  
身の高い女性と子供

の低い女性であるらしく、傍らから侍女が朱傘を差しかける。子供の服装は金地の小袖に袴をはき、赤い陣羽織を着ている。服の金地と赤地の組み合わせは、ちょうど女性と対になる色使いである。あるいはこの二人が親子であろうかとの想像もはたらく光景である。

ては「川口遊里図屏風」(大阪歴史博物館蔵、十曲一隻)に藁苞が描かれており、その中身は鶏肉である(図60)。

・ 駕籠に乗った武士  
大坂城の三の丸を、駕籠に乗った身分の高そうな武士が行く。供まわりの者は長刀や毛槍を担ぐ。前髪を残した近習が駕籠の後に続く(図61)。  
・ 身分の高い女性

62)。女性は赤地に白い花卉紋を散らした小袖に金地の被衣を着る。身分

(四) 子供と遊び  
・ 印地打ち

第二扇の船場の街路で六人の子供が棒を振りかざして遊ぶ様子が描かれる(図63)。印地打ちの場面であると考えられる。印地打ちは大勢が二手に分かれ、石つぶてを投げ合って争う遊びである。印地打ちは端午の節句をあらわす月次風俗として描かれる事例が「洛中洛外図屏風」にみられる。その場合、人びとが争う光景とともに地面に転がる石つぶてを描きあらわすのが通例である。しかし「豊臣期大坂図屏風」では石つぶては描かれていない。

・ 竹馬

第二扇に竹馬で遊ぶ子供が二人描かれる(図64)。竹馬は一本の笹を馬に見立て、跨って走る遊びからはじまった。後に木製や練物の馬の頭をつけた形になった。これを春駒とも呼ぶ。上杉家本「洛中洛外図屏風」にも同様の竹馬がみられる(図65)。

・ 稚児

稚児とは一般には、単に幼い子供を指す語であるが、祭礼の場では特別な役割を持つ子供を稚児と呼ぶ。祭礼における稚児は神の依代とされる。美しく着飾り、肩車や馬に乗せられるなどして足が地面に触れないように扱われる。また寺院や公家、武家で召し使わ



図65 上杉家本「洛中洛外図屏風」竹馬



図64 「豊臣期大坂図屏風」竹馬



図63 「豊臣期大坂図屏風」印地打ち

れた少年も稚児と呼ばれる。禪宗寺院では衆僧に食事を知らせる役割を務めたことから喝食かつしきともいう。能面の中に喝食（稚児）を表わした「喝食面」という名称のものがある。額に銀杏形の前髪を垂らした、半僧半俗の少年の面である（図66）。「豊臣期大坂図屏風」にも二人、銀杏形の前髪を垂らした髪型の少年がみられる。一人は荒和大神神事の行列に参加している（第三扇）（図67）。もう一人は、淀川を下る船に乗っている（第三扇）（図68）。

本章では、「豊臣期大坂図屏風」に描かれた人物について見てきた。八曲という画面の大きさから考えると、そこに描かれた四百九十三人という人数は決して多い数ではない。「洛中洛外図屏風」の中には、六曲一雙の画面に数千人の人数がひしめく作例もある。「豊臣期大坂図屏風」の人数が比較的少ないのは、一つには画面の大半を城郭が占めることによるものであろう。



図67 「豊臣期大坂図屏風」稚児 (1)



図66 能面「喝食」(財団法人三井文庫蔵)



図68 「豊臣期大坂図屏風」稚児 (2)

また、都市図屏風としてこの屏風絵を見た場合、江戸時代の大坂の地図などと比較すると、ずいぶん北東方向に寄った構図であることに気付く。船場や寺町、そして最盛期には五軒の芝居小屋が立ち並んでいた道頓堀など、市井の人びとの営みが繰り広げられていた地域は、この屏風には描かれていない。

#### 四、「豊臣期大坂図屏風」という奇跡 — 結びにかえて

陶磁器や漆器と比べれば、紙という脆弱な材質で構成される屏風絵が、遠い異国の地で数百年の年月を経てこれほど良好な状態で保存されてきたのは、まことに希有なことである。

ヨーロッパに渡った屏風といえば、天正十年（一五八二）年に天正遣欧使節とともに、織田信長がローマ法王へ贈ったと伝えられる「安土城図屏風」が知られている。この屏風は、信長が天正八年（一五八〇）に狩野永徳に描かせたものだという。明治時代以降、何度か探索が試みられたが、誰も発見することはできなかった。他にヨーロッパへ渡った屏風として、明治三十五年（一九〇二）に東京大学史料編纂所教授・村上直次郎氏によって発見された「エヴォラ屏風」がある。ポルトガルの都市エヴォラの図書館に所蔵される屏風である。村上氏によれば「昔は金屏風であつたろうが、紫絹に桐の模様を出した縁が残り、下張りや骨まで露出したものであつた」という<sup>33</sup>。

二〇〇七年には、サントリー美術館と大阪市立美術館で特別展「BIO MBO」展が開催され、好評を博した<sup>34</sup>。出展された作品の中には、徳川幕府から朝鮮国王とオランダ国王に贈られた贈朝屏風・贈蘭屏風がある。贈朝屏風の最も古い記録は元和三年（一六一七）で、文化八年（一八一二）までに友好の証しとして百九十双の屏風が贈られた。しかし、これらもほとんどは失われたとみられ、現存が確認されるものは二点のみである。贈蘭屏風は、現在、オランダ・ライデン国立民族学博物館に十双所蔵されている。ただし制作年代は最も古い作例でも十九世紀まで時代が下る。

こうした事例と比べてみても、「豊臣期大坂図屏風」は十七世紀中頃と

推定される制作年代の古さと保存状態の良さから、その歴史的・美術史的価値は、計り知れないほど高い。

ただし、十七世紀中頃という制作年代は、景観年代（慶長年間）より数十年下ることになる。そのため、「豊臣期大坂図屏風」を豊臣期の大坂の風俗画として見るには、この屏風絵が時世粧をどこまで反映しているか、やや疑問が残る。この屏風に描かれた絵画情報を元に豊臣期の大坂の様相を論じるには、なお慎重なスタンスが求められよう。

そのため、今後、本屏風に描かれた景観・人物について、他の史料との比較検討による図像学的な研究が必要とされる。図像学的な観点から、本屏風の位置づけが明らかにされていくにつれて、その価値はより高いものになるであろう。

## 注

- (1) 「大友宗麟書状」(竹内理三監修・田北学編『増補改正編年大友史料』二十七〔一九六八年〕所収)  
(前略)  
関白様被成□案内者候、御舍弟美濃守殿モ半作之時御覽候てよりハ、終に無御見物候、宗滴ニ御かゝり候て御拜見之由にて候、天主重々之様子、是又言説にも及ましく候、書戴などハ、隙を明候、橋敷以上九ツ、奇特神変、不思議との申事候、三国無双とも可申候哉、(後略)
- (2) 「洛中洛外図屏風」に関する初出の文献は『実隆公記』永承三年(一五〇六)十月二十二日で、次のように記されている。  
甘露寺中納言来、越前朝倉屏風新調、一両画京中、土佐刑部大輔新図、尤珍重之物也、一見有興
- (3) Barbara Kaiser, Schloss Eggenberg, Brandstraetter, Christian, 2006, 10.
- (4) 修復の経緯は Papier Restaurierung vol.5-3, 2004. に掲載された A 17TH CENTURY JAPANESE SCREEN: "Ein indiamisch spanische wandt" as Wall Decoration at Schloss Eggenberg に記されている。
- (5) シンポジウムの講演録は『国際シンポジウム報告書 新発見「豊臣期大坂図屏風」の魅力—オーストリア・グラーツの古城と日本— 新発見「豊臣期大坂図屏風」を読む』(関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所センター、二〇〇九年)に収録されている。
- (6) 前掲注5書
- (7) 前掲注5書
- (8) 「一五八六年十月十七日フロイス書簡」(『十六・七世紀イエズス会日本報告集』第三期第七卷、同朋舎、一九九四年)所収  
〔第三期第七卷、同朋舎、一九九四年〕所収  
塔が内側から開かれると、彼は我らをもそこに連れて行くよう命じ、城と銃眼のある扉の間を通って案内させた。(中略) 関白殿はあたかも一人の私人のように案内役をし、戸や窓を自分の手で開け、そのようなやり方で我らを八階まで連れて行った。(中略) 最上階にはその周りを外廊が取り巻いており、彼らは我らそこに立ち入り、城の工事と共に四、五カ国にわたる平野を遠くから眺めるようにと言った。我らはその外廊に随分長く立ち、彼も我らの中にいたが、下で働いていた五、六千人の人々は目を上げ、上にこのように多数の司祭・同宿それに関白殿がいるのを見て驚いていた。
- (9) 「大坂夏の陣図屏風」に基づいた豊臣大坂城の復元案として、古川重春『日本城郭考』(巧人社 一九三三年)、岡本良一『大坂城』(日本名城集成、小学館、一九八五年)、宮上茂隆「豊臣秀吉築造大坂城の復元的研究」(『建築史研究』三七(一九六七年) など)がある。
- (10) 『中院通村日記』元和二年四月二十一日条(『大日本史料』第十二編之二十四) 四月廿一日晴  
及晩興衣許ヨリ、大坂攻之図出来、欲見可進之由申之、他所之物之由也、則取寄覽之
- (11) 中村博司「狩野家旧蔵「大坂冬の陣図屏風」の成立をめぐる」(『大坂冬の陣図 大坂夏の陣図』戦国合戦絵屏風集成 第四卷、中央公論社、一九八〇年)
- (12) 松田毅一監訳『十六・十七世紀イエズス会日本報告集』(第一期第二卷、同朋舎、一九八七年) 所収。
- (13) 前掲注12書
- (14) 『義演准后日記』慶長五年(一六〇〇) 五月十二日条  
次豊國明神ノ鳥井ノ西ニ、甘間斗ノ二階門建立、大坂極楽橋ヲ被引了、二階ノ垂木少々出来了、中間ノ二階ハ猶自余ヨリモ高キ也、柱以下悉蒔絵也、下ノ重円柱悉黒漆也、組物採色也、結構驚目耳  
(弥永貞三、鈴木茂男校訂『義演准后日記』第二卷〔続群書類従完成会、一九七六年〕によつた)
- (15) 岡本良一『大坂城』岩波新書(青版七三九)(岩波書店、一九七〇年)
- (16) 渡辺武「新史料豊臣時代大坂城三の丸図みつかる」(『観光の大阪』No.三五二、大阪観光協会、一九八〇年)
- (17) 前田利長屋敷については『関原集』『川角太閤記』に記事が見られる。蜂須賀家

屋敷については「蜂須賀家記」(本庄栄治郎・黒羽兵次郎監修、大阪市立中央図書館市史編集室編『大阪編年史』第三卷〔大阪市立中央図書館、一九六七年〕所収)に次のような記事がある。

「蜂須賀家記」

瑞雲公、諱家政、慶長五年庚子六月、東照公師<sup>レ</sup>師<sup>レ</sup>上杉景勝<sup>レ</sup>喜平次命<sup>三</sup>公自守<sup>二</sup>其玉造邸<sup>一</sup>、(後略)

また鍋島家屋敷については、「鍋島直茂譜考補」(佐賀県立図書館蔵、『佐賀県近世史料』第一編第一卷〔佐賀県立図書館、一九九三年〕所収)に次の記事がある。

「鍋島直茂譜考補」

一五月九日、直茂公大坂玉造ノ御屋敷ニ数寄屋ヲ御用意アリ、太閤殿下ヲ被<sup>レ</sup>請ケルニ、辰ノ刻計リニ殿下御出、御席ニハ加賀大納言利家卿・富田左近将監信高祇候、(後略)

(18) 『関原集』(国立公文書館蔵)は『新修大阪市史』史料編第五卷(大阪市史編纂所・大阪市史料調査会、二〇〇六年)、『川角太閤記』は『改定史籍集覧』第十九冊(臨泉書店、一九八四年)所収の記事によった。

(19) 『撰津名所図会』巻之四

豊太閤御在城より市中となりて、京師上下のゆき、夜の船、昼の船、出るあり、着あり、群来る人の絶間もなく、賑しき事ならぶ方なしむかしは大江ノ岸、大江ノ浦といひしも今は京橋筋三丁目四丁目といふ。又八軒の旅舎あれは土俗八軒屋と地名にす。

(20) 「石川忠総大坂陣覚書」(『大日本史料』第十二編之十九)

(21) 「日本輿地通志」撰津志(大阪市立中央図書館蔵、『新修大阪市史』史料編第五巻所収)

東橋堀<sup>レ</sup>堀此<sup>レ</sup>用<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>水中央<sup>レ</sup>舟<sup>レ</sup>道<sup>一</sup>、下皆倣<sup>レ</sup>此<sup>ニ</sup>、(○)自<sup>二</sup>難漕橋ノ東<sup>一</sup>引<sup>二</sup>大河<sup>一</sup>

ヲ<sup>二</sup>南流<sup>ス</sup>、天正十三年開鑿<sup>ス</sup>、至<sup>二</sup>末吉橋<sup>一</sup>西折曰<sup>二</sup>長堀<sup>一</sup>、寛永二年開鑿<sup>ス</sup>、至<sup>二</sup>大和橋<sup>一</sup>西折曰<sup>二</sup>道頓堀<sup>一</sup>、慶長十九年道頓者開鑿<sup>ス</sup>、下流俱<sup>二</sup>入<sup>二</sup>大河<sup>一</sup>、

(22) 『当代記』(史籍雜纂『当代記 駿府記』〔続群書類従完成会、一九九五年〕所収)

去七月上方衆内府公江謀叛時大坂惣構口々番手事

一 浜の橋 毛利民部大輔 一 高麗橋 高田河内守 藤原三河守

一 平野町橋 宮木丹後守 一 淡路町橋 早川主馬

一 備後橋 西島修 同主殿 一 一本町筋橋 蒔田権助

一 久太郎町橋 蜂須賀阿波守 一 久宝寺町橋 竹中伊豆守

一 かんとうし町橋 服部土佐守 うなま守 橋本共助 一 小野木縫殿助

(中略)

右手前ノ一番所ヲ被<sup>レ</sup>立、番衆儘ニ在<sup>レ</sup>之而、妻子など出る事をは堅可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>停止<sup>一</sup>候、往還は無<sup>レ</sup>滞可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>通候、以上、

長東大蔵

慶長五年庚子七月十五日 増田右衛門尉

徳善院

(23) 『兼見卿記』天正十一年八月(『史料纂集』〔続群書類従完成会、一九七六年〕所収)

廿九日、戊寅 筑州折紙之為礼、至大坂発足、上橋野六舟 小中間六人 長刀 人夫

三人、今夜森口ニ一宿、

□日、己卯 早天発足森口、已刻下着大坂、(中略) 長岡越中宿所へ音信、屋敷普請場ニ在之、即面会、築地以下普請驚目了、宿所未飯屋之跡也、諸侍各屋敷築地也、広大也、在家天王寺へ作続也、下向之次、住吉へ社参、先年炎上以後未飯屋也、直至泉之堺、町以後見物、当津ニ一宿了、以当津案内者、トチ折敷廿枚・梔丹膳・塩肖三斤・朱一斤□□今夜大雨降、旅宿不弁也、二帖敷之所也、雨

キリ迷惑了、(後略)

(24) 「一五九八年度年報(パシオ書簡)」(『十六・七世紀イエズス会日本報告集』〔第一期第三卷、同朋舎、一九八八年〕所収)

(大坂城に新しく)巡らされた城壁の長さは三里にも及んだ。その労力に対して支払われる賃金は数千金にも達したが、太閤様はこれについて少しも支払うことはなかった。その区域内には(それまでに)商人や工人の家屋(七万軒以上)があったが、すべて木造だったので、住民自らの手ですべて二、三日中に取り壊されてしまった。(その命令に従わぬ者は皆、財産を没収すると伝えられていた。ただし(立ち退きを命ぜられた)住民に対しては、長く真

つ直ぐな道路で区分けした代替地が与えられた。そしてそれぞれの家屋は軒の高さが同じになるようにして、檜材——日本における最良の材木——を用いるようにと命令された。この命令に従わなかった者は、地所も(建築に)

必要な材木も没収されるということであった。

(25) 『住吉松葉大記』巻第廿二(『住吉松葉大記(下)』〔大阪市史料第六十三輯、二〇〇四年〕所収)

造営部二十一

(前略)

慶長十一年津守<sup>ノ</sup>家盛<sup>ノ</sup>記<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、当社造営<sup>ノ</sup>事豊臣秀頼公ヨリ被<sup>レ</sup>仰付<sup>一</sup>、慶長十一年丙午九月廿七日片桐東市正殿御奉行ニテ、則片桐殿ヨリ使者荒木勝太

ト云フ人ヲ当所へ被<sup>レ</sup>遣、大工<sup>ノ</sup>棟梁ハ泉州堺亀屋与左衛門・与右衛門兩人来

リ退転ノ所々被<sup>レ</sup>相尋<sup>二</sup>ニヨリ、兵部<sup>ノ</sup>大夫津守<sup>ノ</sup>家盛<sup>ノ</sup>政所隠岐<sup>ノ</sup>守源<sup>ノ</sup>永

家司越中ノ大夫菅野崇詮・正禰宜若狭守神奴明永四人、当社ノ大工于時総大工宗兵衛権大工与兵衛兩人ヲ召連出テ所々ノ指図申渡ス、于時本願北室快秀、先神館殿被立、指図ハ往古ニ相違也惟朝云、此ノ所文段義理不通、

(中略)

慶長十二年分

一、本社二三四ノ弊殿柱立二月十日、一ノ神殿御前玉垣同日柱立也大工藤右衛門、

一、蓮池ノ南築屋四月十一日柱立、

一、天上ノ御旅所三月廿一日柱立、同、左右ノ御殿同時分ニ立、大工藤右衛門

惟朝按左右ノ御殿不審、

一、神宮寺ノ築地モ此ノ度御再興也、南ノ大門柱立閏四月十九日、北西東ノ門共モ出来惟朝按今無東門、

一、西塔柱立四月十五日、西三昧堂同日柱立、御奉行片桐主膳、正、大工但馬

守、

一、東塔御奉行片桐東市正、大工亀屋与左衛門、

一、東西両僧坊四月十七日柱立、御奉行吉田次左衛門、

一、今主ノ社・石舞台・築屋出来、

(後略)

(26) 『元亨釈書』には、永仁二年に木造の鳥居が朽ち果てたため、忍性が新たに石造の鳥居を建立した事が記されている(『国史大系』第十四卷「秀英舎、一九〇一年」所収)。

『元亨釈書』

永仁二年。奉勅管天王之至務。捨俸餘益悲敬二院。此寺大門之外有衛門。俗曰鳥居。鉅木宏材。歳久朽類。性出新意以石新之。高二丈五尺。

(27) 「一五六二年、堺発信、ガスバル・ヴィレラ師の、イエズス会の司祭および修道士宛の書簡」(松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集』(第三期第二卷、同朋舎、一九八七年))

(28) 松田毅一・川崎桃太訳『完訳フロイス日本史I 織田信長編I 將軍義輝の最期および自由都市堺』中央公論社、二〇〇〇年

(29) 『新古今和歌集』卷第二に、次の歌が収載されている。

五十首歌奉りし時 寂蓮法師

暮れてゆく春の湊は知らねども霞に落つる宇治の柴舟

(30) 『羈旅漫録』(『日本随筆大成』第一期「吉川弘文館、一九七五年」所収)には、大坂について次のように記される。

○大坂にてよきもの三ツ。良賈、海魚、石塔。あしきもの三ツ。飲水、鱧、鱈、料理。

(31) 「塩魚干魚商旧記」(大阪市史編纂所蔵、『新修大阪市史』史料編第五卷所収)

三町御開発

塩魚干鯛問屋由緒書并ニ雑喉場之由来有

一、当地塩魚問屋根元ハ、往古天正ノ頃迄、天満鳴尾町辺ニ魚商売人一統住居致渡世候処、豊臣家四海御一統、大坂御成就之上、所々分諸商人共北組・南組両郷之町々江追々相集、商家職人家業経営候様相成、(後略)

(32) 「京橋市場古来書」(大阪市史編纂所蔵、『新修大阪市史』史料編第五卷所収)

一、京橋北詰鮒市場之儀ハ、慶長元丙申年於伏見之御城御数奇屋に御茶御興行之砌り、御大名様方御振舞御座被為成候節、御食胎イ御座候ニ付、京・伏見之魚屋・八百屋・鳥屋被為 召出御穿撃被為 成候得共、何茂御注文之表差上申開仕候所ニ、其頃川魚ニ毒ヲ飼杯ト世間ニ風聞申成シ、一節川魚之売買留り申候御事、(後略)

(33) その後エヴォラ屏風は、一九六三年に松田毅一氏によって下張り文書の全容が採録、紹介された。(老沢有道・松田毅一『ポルトガルエヴォラ新出屏風文書の研究』ナツメ社、一九六三年)

(34) 『BIOMBO/屏風 日本の美』サントリー美術館・大阪市立美術館・日本経済新聞社、二〇〇七年

※図版7はエッゲンベルク城博物館より提供していただいた画像である。

※図版9、12、15、16、51、58、60は「特別展 大坂図屏風 ―景観と風俗をさぐる―」(大阪城天守閣、二〇〇五年)より転載した。

※図版35は狩野博幸「新発見 洛中洛外図屏風」(青幻舎、二〇〇七年)より転載した。

※図版38、42、47は森暢編『新修日本絵巻物全集』第二十八卷(角川書店、一九七九年)より転載した。

※図版44は『七十一番職人歌合/職人尽絵/彩画職人部類』(江戸科学古典叢書6、恒和出版、一九七七年)より転載した。

※図版56は千葉徳爾註解『日本山海名産名物図会』(社会思想社、一九七〇年)より転載した。

※図版65は石田尚豊・内藤昌・森谷尅久『洛中洛外図大観』(小学館、一九八七年)より転載した。

※図版66は佐藤昭編『三井家旧蔵 能面』(学習研究社、一九九二年)より転載した。

※図版13、14、20、21、24、34、36、37、39、40、41、43、44、45、46、48、49、50、52、55、57、59、61、64、67、68は関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究所蔵、Erich Lessing(エリック・レッシング)氏撮影による写真である。

## 謝辞

本稿を執筆するにあたり、「豊臣期大坂図屏風」を初めて日本に紹介してくださったフランチェスカ・エームケ先生（ケルン大学教授）に感謝いたします。「豊臣期大坂図屏風」の研究について、高橋隆博先生（関西大学教授／なにわ・大阪文化遺産学研究所センター長）、藪田 貫先生（関西大学教授／なにわ・大阪文化遺産学研究所センター総括プロジェクトリーダー）、狩野博幸先生（同志社大学教授）、北川 央先生（大阪城天守閣研究副主幹／なにわ・大阪文化遺産学研究所センター研究員）から多くの御教示と知識をいただきました。また国際シンポジウムと研究会を通じてペーター・パケシユ先生（州立博物館ヨアネウム総監督）、バーバラ・カイザー先生（エッゲンベルク城博物館主任学芸員）、朝治啓三先生（関西大学教授）、長谷洋一先生（関西大学教授／なにわ・大阪文化遺産学研究所センター研究員）、黒田一充先生（関西大学教授／なにわ・大阪文化遺産学研究所センター研究員）、イサベル・田中・ファン・ダーレン先生（財団法人 日蘭学会）から多くの示唆をいただきました。諸先生方に謹んで感謝申し上げます。